

3. 核家族と妊娠、分娩、異常児発生

東京大学医学部産婦人科

水野正彦・佐藤孝道
箕浦茂樹・森田良子
荻野満春・香山文美

研究目的

本研究の目的は核家族化に伴う諸問題が、妊娠、分娩、異常児発生に及ぼす影響を多面的に解析し、この問題での、母子保健行政のあり方を検討することにある。核家族化は、都市部から農村部へと進行しているが、妊娠・分娩との関係で本格的な検討が行われたことは未だない。

研究方法

北大、東北大、東大、名大、京都府立医大、近畿大、広大、久留米大の計8機関から集められた昭和55年及び昭和56年度分娩例6,755例を対象に、大型コンピュータspssシステムを用いて解析した。核家族化に伴う諸条件もあわせて検討する目的で、居住家屋の種類、職業の有無、妊娠中の旅行、コーヒー、抹茶の嗜好についても解析した。また、核家族化における子供数の重要性を考え、子供数の因子についても検討した。

研究結果

(1) 子供数と妊娠・分娩・異常児発生

- a 統計処理した症例中、子供の数が0のものが、3,130例、1人2,562例、2人857例、3人134例であった。子供数に伴う妊娠、分娩経過の変化をみると、切迫流産は次第に減少(子供数0人:6.9%,1人:4.8%,2人:3.6%,3人:3.0%)し、また、妊娠中毒症は子供の数が0の場合が最も多い(子供数0人:14.9%,1人:8.3%,2人:9.7%,3人:9.7%)。子宮内胎児死亡(IUFD)は、子供の数に従い増加し、(子供数0人:1.7%,1人:1.7%,2人:2.2%,3人:3.0%)、前期破水は減少する(子供数0人:16.8%,1人:9.7%,2人:8.6%,3人:6.0%)。
- b 子供数に伴い生活環境も変化し、ビル居住者が減少し、一戸建住宅に住むようになる(ビル居住、子供数0人:42.3%,1人:34.1%,2人:28.2%,3人:15.7%)。職業婦人の頻度や、

妊娠中の旅行は、一度減少後、増加する(職業婦人、子供数0人:38.0%,1人:22.9%,2人:21.7%,3人:29.9%)、妊娠中の旅行、子供数0人:38.1%,1人:35.1%,2人:32.9%,3人:40.3%)。また、抹茶嗜好は変化しないのに対し、コーヒー嗜好者は増加する(子供数0人:40.1%,1人:47.1%,2人:51.1%,3人:53.7%)。

(2) 夫、子供以外との同居と妊娠、分娩、異常児発生

- a 全症例中、夫の親と同居しているものは19.0%で、うち両親と同居しているものが最も多い。本人の親との同居はわずか3.4%にとどまる。(図1)
- b 同居の形態と、生活環境の変化をみると、(図2)、ビル居住者が同居なしでは44.3%であるのに対し、夫の親などの同居では、2.8~8.5%にすぎない。また、職業婦人の頻度は、夫の両親等との同居で増加し、同居なしでは少ない。妊娠中の旅行は、同居なし及び、本人の両親との同居群で多い。コーヒー及び抹茶嗜好に関しては、特別な傾向は認められない。
- c 同居の形態と妊娠・分娩(図3)
切迫流産の頻度は同居の形態によってほとんど変化しないが、切迫早産は同居なしで多く(4.7%)、本人の両親との同居で少ない(2.8%)。悪阻や妊娠中毒症も同居の形態によってほとんど変化しない。陣痛誘発は、同居なし21.4%、夫と両親との同居21.7%、本人の両親との同居20.8%で、夫の兄弟との同居15.2%に比べやや高い。子宮内胎児死亡(IUFD)は、本人の両親との同居でやや高く(4.2%)他は(1.8~2.8%)に止まる。前期破水は、同居なし13.3%、本人の両親との同居で13.9%と、他(8.2~11.3%)に比べるとやや高い。外表奇形は、同居なしで最も低く、1.3%、本人の両親との同居でやや高く2.8%であった。

考 察

- (1) 核家族、或いは親などの同居の妊娠・分娩に及ぼす影響は、単に夫、子供以外の家族構成員によって、妊婦が肉体的、精神的な影響を受けるにとどまらない。複雑な他の要因との絡み合わせの結果として、妊娠、分娩を検討することが重要といえる。子供の数は、核家族と直接関係ないともいえるが、初産の核家族妊婦と、既に妊娠・育児の経験のある妊婦の間では、同じ核家族であってもその意味は異なる。こうした観点から、子供の数についても、特に妊婦の生活環境の変化との関連で、妊娠・分娩に及ぼす影響を検討した。分娩時間などは経産回数という生物学的な影響をうけるものと容易に理解されうが、切迫流産、切迫早産、妊娠中毒症、前期破水などは、子供の数の変化に伴う生活環境の変化の影響をも、あわせて受ける可能性が考えられる。事実、住居、職業婦人の頻度、妊娠中の旅行、コーヒー嗜好など、妊娠・分娩に影響を及ぼす可能性のある生活環境要因は、子供の数によって大きく変化することが明らかとなった。このうち、住居、職業婦人の頻度、妊娠中の旅行については、その傾向の背景を比較的容易に理解しうが、コーヒー嗜好が子供の数の増加に伴い何故有意に増加するかは、特に興味あるところである。妊娠に対する妊婦自身の心構えが関係するのかもしれない。
- (2) 核家族化に伴い、妊娠・分娩に影響を与える可能性のある生活環境も関連して大きく変化する。親などの同居している場合は、一戸建住居に住む場合が多く、また、職業婦人も多くなる。妊娠中の職業が、妊娠・分娩に及ぼす影響に関する報告もあり、核家族化の中で職業婦人の頻度の変化は無視できない要

因といえる。妊娠中の旅行は、同居なしと本人の両親との同居群で、夫の両親との同居に比べ高い。妊娠中の旅行が、里帰りや深い関係を示しているとも考えられ、核家族化の中のもう一つの重要な要因といえる。コーヒーや抹茶の嗜好と核家族化の間には、昨年度の報告と同様、特別な傾向は認められなかった。

- (3) 切迫早産の頻度は、同居なしが、他に比べやや高い。これは家事労働量を反映しているとも考えられる。しかし、妊娠中毒症や前期破水の頻度では、はっきりした傾向は認められない。子宮内胎児死亡と新生児外表奇形は、本人の両親との同居で高い傾向がみられるが、その意味づけは難しい。
- (4) 今回、同居形態を中心に分析したが、それに伴う生活環境の変化の要因としての重要性が明瞭に示された。来年度は、子供数を含め、核家族化に関連した生活環境諸因子の変化と、妊娠・分娩との相互関係を中心に分析する予定である。

要 約

核家族化が、妊娠・分娩・異常児発生に及ぼす影響を、核家族化に伴う生活環境の変化も含め検討した。

発表文献

佐藤孝道、荻野満春、箕浦茂樹、水野正彦、坂元正一：核家族化の妊娠・分娩に及ぼす影響に関する統計的検討、第26回日本不妊学会総会、1981、11。於京都

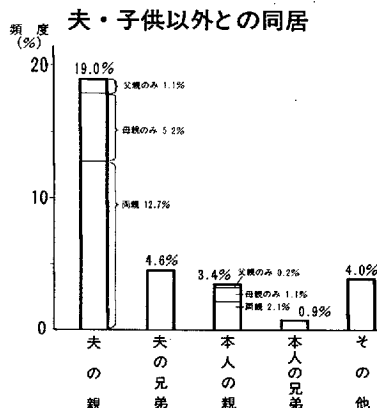


図 1

図2

同居の形態と生活環境

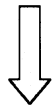
	同居なし n=5466	夫の両親と n=861	夫の母親と n=353	本人の両親と n=142	夫の兄弟と n=257
ビル居住(%)	44.3	2.8	8.5	5.6	5.4
職業婦人(%)	28.0	38.4	42.2	40.1	40.9
旅行(%)	37.2	31.5	31.7	37.5	34.6
コーヒー嗜好(%)	44.5	43.7	45.3	42.4	44.0
抹茶嗜好(%)	7.7	9.2	9.1	9.7	10.1

図3

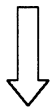
同居の形態と妊娠・分娩

	同居なし n=5466	夫の両親と n=861	夫の母親と n=353	本人の両親と n=142	夫の兄弟と n=257
切迫流産(%)	5.5	5.1	7.6	4.9	7.0
切迫早産(%)	4.7	4.2	3.4	2.8	3.9
悪阻(%)	0.4	0.5	0.3	0	0.4
妊娠中毒症(%)	11.6	10.5	12.5	9.7	13.2
陣痛誘発(%)	21.4	21.7	18.4	20.8	15.2
I U F D(%)	1.8	2.1	2.0	4.2	2.8
前期破水(%)	13.3	10.2	11.3	13.9	8.2
外表奇形(%)	1.3	1.4	1.4	2.8	1.6

母子愛育会図書室



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



研究目的

本研究の目的は核家族化に伴う諸問題が、妊娠、分娩、異常児発生に及ぼす影響を多面的に解析し、この問題での、母子保健行政のあり方を検討することにある。核家族化は、都市部から農村部へと進行しているが、妊娠・分娩との関係で本格的な検討が行われたことは未だない。